
冬枯れの葉と珈琲の薫り

三衣 千月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬枯れの葉と珈琲の薫り

【Nコード】

N5514BA

【作者名】

三衣 千月

【あらすじ】

・mixi日記よりお引越し&追記。

この街には、ある一つの条例がある。
誰が何の目的で作ったかは知らないが
この街に住む以上、それは日常なのだ。

ある大学生の、珈琲にまつわる一コマのお話。

(前書き)

シリーズ・条例都市
？

冬の朝は嫌いだ。

突き刺すような気温に、やたら静かな雰囲気。空気もずしりと重い。

ただでさえ狭い六畳一間の安アパートがさらに小さく感じられる。

ピピピピ・・・ピピピピ・・・ピピピピ・・・

鳴り響く目覚ましのアラーム音。

コタツで突っ伏したままの状態で、音のする方向を探し乱暴に叩いて時計のアラームを止める。

どうやら、途中で寝てしまったようだ。

コタツの上には、開けられたままのノートパソコンが無機質に画面を開いたまま、次の入力を待っている。

「・・・やっべえ。」

予定の半分も終わっていない。

あの教授は期限を過ぎたらレポートを受け取ってくれない事で有名な。

午前の講義を犠牲にすれば・・・なんとかなる、か？

のたりと立ち上がり、流し台にカップ麺のゴミを運ぶ。
数日前の茶碗などが、まだ流し台を占拠していた。

今日も随分と寒い。やかんを火にかけて棚からミルを取り出す。
冷蔵庫に入れておいたコーヒー豆を定量、ホッパーに放り込むと
ちょうど分量分入れた所でコーヒーの袋は空になった。

がり

がり

がりっ

手回しのハンドルを手荒に回す。

珈琲豆を挽いてわざわざ淹れると聞くと、

ずいぶんな珈琲好きなのだなど勘違いされてしまっただろうが

正直言つてコーヒーはあんまり好きではない。むしろ嫌いかもしれない。

年を重ねればあの苦味が旨く感じるようになるかと人は言う。

残念だが、齢20にも満たない俺のような若造には分からないよう
だ。

「どうせまだお子様ですよ。俺は。

条例なんてモンがなきゃ、絶対飲むもんか。」

この街には、他の街にはない一つの条例がある。
それ以外は、本当に何の変哲も無い平凡な街なのだ。
まったく、一体誰が！？何の目的で!？

「なんだよ。“毎朝珈琲条例”って。
嫌がらせ以外の何モンでもねえなっ。」

だあんっ！

乱暴にミルを流し台に置いた。

挽き終えた都市指定の豆を使って、コーヒーを淹れる。
ちゃんと飲まなければ、条例違反で罰金だ。

嫌いでも飲むしかない。一回につき5万の違反金は、
俺のような貧乏学生には非常にツライ。

ともあれ、飲めば問題ないのだ。飲めば。

ふうとため息一つついて、コタツへ。午前分の代返も頼まねば。

パソコンと睨み合いながらせつせとレポートを仕上げる。

この調子だと、なんとか間に合いそうだ。

完全に冷めきったコーヒーを飲み干す。くそっ、苦い。

てってれ〜・・・ てってれ〜・・・ てってれ〜

「ん？メールか・・・。」

メールの送り主は、友人だった。

『代返OK。お礼は寿庵の天婦羅定食でいいぜ。』
とのこと。ちえ、すっかりしてやがる。

「さんきゅ。んじゃまあ、今日でいいか・・・っと。」

そう打ち込んでメールを返す。

対する友人の返事は、『もちろん大歓迎!!』だった。

7

午後の講義でなんとか無事にレポートを提出し、

友人と共に大学近くの定食屋へと赴いた。安くて美味しい人気の店。

寿庵。

二人してそこで少し早めの夕食をとる。

アイツめ。さりげなく定食のご飯大盛りにしやがった。

おごりだからって……。

「じゃ、また明日な。」

「おおづ、明日はちゃんと来いよ〜?」

「わあってるよ。明日はレポートもないし大丈夫だ。」

「そいつは良かった。じゃ。」

軽く挨拶をして、別れる。

冬の冷たい乾いた風が枯葉を舞い上げて横を掠めた。まだ夕方だと言うのに、沈みかけた陽に照らされてあたりは暗いオレンジ色に染まっていた。

天気予報によれば、明日も冷え込むそうだ。

六畳一間の俺の居場所に帰って、テレビでも見てのんびりしよう。

誰からも咎められることも無い、一人暮らしだもの。

誰の気に留められることも無い、独り暮らしだもの。

「今日はコタツで寝ないようにないなあ……。」

何をするわけでもなく、本屋に寄ったり、ゲーセンに寄ったり。こつこつ気分を、人恋しいとでも言うのだろうか。風が冷たい。

コンビニで弁当を買ってアパートの階段を上がる。所々錆びた階段が

きしいっ

と冬風に吹かれる木々と同じような音をたてて軋んだ。
すっかり暗くなった景色から逃げるように、街灯の明かりを頼りに家の鍵をあけて、誰もいない六畳一間へと入る。

今夜は、早く寝よう。

冬の朝は嫌いだ。

突き刺すような気温に、やたら静かな雰囲気。空気もずしりと重い。

ただでさえ狭い六畳一間の安アパートがさらに小さく感じられる。

ピピピピ・・・ピピピピ・・・ピピピピ・・・

鳴り響く目覚ましのアラーム音。

今日も、何の変哲も無い一日が始まる。布団から起き上がり、コンビニ弁当のゴミをゴミ箱へとほりこむ。

今日も相変わらず寒い。やかんを火にかけ棚からミルを取り出して、

冷蔵庫から都市指定のコーヒー豆を…

「……………あれ？」

コーヒーの入ったアルミの袋が見当たらない。

「あ。」

よくよく思い出してみれば、昨日飲んだ時点で空っぽになったことに思い当たった。

舌打ちしながら頭を掻く。どうしたもののか。

まあ、一日くらいならバレやしないだろ。多分。

今日は、帰りにスーパーに寄って豆を買ってこなければ。

がちゃ。

ドアを開けて、冬枯れの街を歩いて大学へと向かう。

葉一つない街路樹。白い息。曇り空。なんだか憂鬱だ。

交差点で信号が青になるのを待っていると、

「君きみ、今朝はコーヒーを飲んだかな？」

とコートをはおった壮年の男性に肩を叩かれた。

マジかよ。なんでよりによってこんな時に。

反射的に踵を返して走り出した。

前回も同じパターンで違反禁を払わされたからだ。どうやって

見分けているのかはわからないが、どうやら条例違反は

すぐに見抜かれることだけは確かなようだ。

「あ、こらっ！！」

男性が追いかけてくるが、お構い無しに駆ける。

なんだって朝っぱらからこんなことやってんだ。俺。

細い路地をいくつも使い、なんとか男性を撒いて息を切らして自分のアパートへと戻る。

「ぜえ、ぜえ…もうヤダ。」

もう、今日は休んでしまおう。

まさか朝から全力疾走させられるとは思わなかった。

メールで、友人に豆を持ってきてくれと伝えることにしよう。

アパートの階段を上がり、部屋に入ろうとすると、

「ね、君。」

とふいに声がした。思わず、またか!?!と身構える。

だが、声の主は女性だった。

隣の部屋の住人で、ドアを開けて顔を覗かせてこちらを見ている。

何事かと思っていると、さらに

「君、今日コーヒー飲んでないんでしょう。」

淹れてあげるから寄っていきなよ。」

と彼女は言った。

…なんで分かるんだ?この人…。

俺は随分と怪訝な顔をしていたのだろう。人懐こい笑みを浮かべて彼女は笑った。

「ふふ、心配しなくても通報したりなんかしないから大丈夫。」

どのみち、珈琲を飲まなければ外出もままならないのは確かだ。しばらく考えた後、ごちそうになることにした。

「オジヤマシマス……。」

同じ六畳一間でも、ずいぶんと違った印象をうける。案内されたテーブルに座り、珈琲豆を挽く音を聞く。生活感に溢れた部屋。置いてあるものや雰囲気を見て、“女性の部屋”だとあらためて認識する。なんとなくこそばゆいようで、居心地が悪い。

ことり。

「どつぞ。」

なんともお洒落なカップとソーサーで珈琲が二つ運ばれてきた。彼女もテーブルの対面に座り、カップに砂糖を入れる。

「イタダキマス……。」

砂糖を入れて、カップを持ち上げ一口。

「っ…おいしい。」

驚いた。同じ珈琲豆とは思えないほど味が違う。

苦いには苦いが、すっきりした苦さと言っか、癖がないと言っか。驚くのを待っていたかのように、優しい笑みを浮かべて彼女が

「そう？でもアナタも毎日飲んでるでしょ？」

と、くすくす笑いながら、問いかけてきた。さあっと髪をかきあげながら

カップに入った珈琲をゆっくりと傾けて。そんな仕草をされては慌ててしまうではないか。

「いや、えつと・・・飲んでるんですけど、違っつて言っか、俺、珈琲が嫌いなんですけど、でも、コレは何か・・・全然違っつておいしいです。」

「あはは、そんなに緊張しなくなっつていいのに。とっつて食べたりなんかしないよ？」

「あ…いや、ソノ……ゴメンなさい。」

俺、緊張してる？何で？

いやまあ、理由は分かりすぎる程に分かっているのだが。思わず彼女から目を逸らしてしまう。彼女は変わらず笑ってこっちを見ている。

「あの、どうして……どうしてこんなに美味しいんですか？」

苦し紛れにそう質問すると、彼女はしばらく考え込んで、ゆっくりと話しはじめた。

「そうねえ。君、コーヒー豆はどこに保存してる？」

「え？冷蔵庫ですけど……。」

「ミルに入れる時に、冷蔵庫から出してすぐに使っていない？
常温くらいになるまで待てば、えぐみがあまり出ないよ。」

確かに。いつも冷蔵庫から出してすぐにガリガリと挽いている。
そうか、少し待つのか。

「あと、ミルで挽くなら、ゆっくり挽くと熱が出にくくなって香りが逃げなくていいし……。」

いつも、力まかせに乱暴にガリガリと挽いている。そうか、ゆっくり挽くのか。

「それに、この豆なら荒挽きのほうが美味しい。ミルを使わずにバンドナとかにコーヒーを包んで砕けば余計な苦味もなくて、すっきり飲めるかもよ?」

「へえ……。」

知らないことだらけだ。これまで、そんな事を考えたことも無かった。

珈琲の説明をしている彼女はとても楽しそうだ。他にも、珈琲に関わる色々なことを聞かせてくれた。

「私も最初はコーヒーが嫌いだね?」

どうせ飲まなきゃいけないなら、少しでも美味しく飲みたくて。調べてるうちに、好きになっちゃった。

あははっ、おかしいよねえ。」

そう言って笑う彼女につられて、俺も笑った。

「あ、やっと笑った。」

そういえば。この所あんまり笑っていなかった気がする。誰かと話す機会も減って、話すといえば友人数人。随分とさみしい生活を送っていたんだなあ。言われるまで気がつかなかった。

それから少し話して、彼女が仕事に行くと言うので俺も大学へ行くことにした。

「またおいでよ。笑顔になれるコーヒー入れてあげるから。」

そう言って笑う彼女の笑顔に、少しどきりとした。よく笑う人だ。こっちまで幸せな気分させられる。礼を言って、ドアを開けるときに、ふと気にかかった事が一つ。

「そういえば、俺が珈琲飲んでないってどうしてわかったんです？」

振り返って聞いてみた。

「それはね・・・内緒。」

少し意地の悪い笑みを浮かべて、そう言った彼女はなんというか、
すごく率直に、且つありのままを恥ずかしげもなく述べるとするな
らば

とてもキレイだった。

なんだろう、すごく気になるじゃないか。こつ、色んな意味で。
気になりつつも、もう一度礼を言って、部屋を後にした。

今朝も変わらぬ冬の朝だ。

冷たくも暖かい陽射しに、少し柔らかな雰囲気。空気もふわりと軽
い。

冬の冷たい乾いた風が枯葉を舞い上げて横を掠めた。

心なしか、冬枯れの葉が舞う風は珈琲の香りがするような気がする。

この街には、他の街にはない一つの条例がある。
それ以外は、本当に何の変哲も無い平凡な街なのだ。
一体誰が？何の目的で？

「珈琲か……。」

微かに香る風に吹かれながらぼつりと呟いた。
明日の珈琲はきつとおいしく淹れられる気がする。

ここは、毎朝珈琲を飲む街。
薫り高い街。

のち、午前の授業をさぼったくせに笑顔な俺に対して

友人から理由を厳しく言及されたが、それはまた別のお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5514ba/>

冬枯れの葉と珈琲の薫り

2012年1月15日01時53分発行